

投稿

初めて作った望遠鏡と大将 ～フクちゃんの思いで～

花岡 靖治（オルピス株式会社）

1. 阿波の徳島

徳島は小さな町です。国鉄の徳島駅を降りると駅前通がまっすぐ目に入り、町を横切る新町川にかかった新町橋をわたり、その通りの突き当たりは眉山と呼ぶ山になります。いまではケーブルが付いていますがそれは戦後もだいぶ経ってからのことです。フクちゃんを先頭に、麓から自分たち好みの道を探しだしてよく遊びに頂上まで登った山です。春は満開の桜の下に行ってウワーっと歓声を上げたり、夏はセミとり、失敗して小便を顔にかけられ、秋は椎の実拾いをしたり落ち葉の上をそりで滑ったり楽しいことがいっぱいでした。

眉山と言う名前は小学校一年生の時先生に教わりました。遠くからこの山を見ると人の眉のように見えるからなのですよ・・・。

そしてそのとき教えてくれたことは黒板に四国の全体の図を書きました。コウモリのようなねと言ってそう覚えなさいと言われました。

ここが徳島県、ここが香川県、高知県そして愛媛県四つの県があるから四国といいます。分かりましたね！と言われました。

ついでお話ししますが、修身？か国語の時間か、日本の国が出来たのは大昔神様が海に浮かんでいる島に縄をかけよいしょ、よいしょと引き寄せて出来たのが私たちの日本の国なのですよとおそわりました。すごいと思いました。僕の徳島は本州にくっつくような四国にあるのでその話しに実感がありました。

2. 天才フクちゃん

このきれいな眉山の麓に僕がいった幼稚園と新町国民小学校がありました。学校の始業のベルがかすかにきこえるくらいのところに僕の家がありました。

フクちゃんは、僕が小さいとき住んでいた家の斜め向かいの家の三つ年上のお兄ちゃんです。お父さんは大工さんでフクちゃんはとても器用な人で、いろんなことを教えてくれました。名前は、相原福治か福治郎だったかハッキリしません。今日のお話の始まりは、ぼくの小学一年生前後からのことなので、漢字もまだ知らないときのことですからはっきりしないのは仕方ないです。

彼を陰ではミカズキと呼んでいました。いろんなこと教えてくれたのに失礼なことなのですが、彼に対してきげんが斜めの時はそう呼んでしまいました。そのわけは三日月の形をした鮮やかな傷の跡が、彼の額の真っ正面に見られるからです。手の込んだことに額に3本のしわわがあって、たなびく薄雲のようでした。僕はこのときから天体とつきあったことになります。フクちゃんが話してくれたのですが、小さいとき二階にのぼる階段から落ちた時についたものです。それは運の悪いことに落ちたところに自転車があつて前の泥よけのこぐち正面に頭をぶっつけたそうです。きっと前が見えないほど額から血を流したことと思います。血をたくさん流したことでしょうが、頭の中味は立派でした。

フクちゃんの家にはよく遊びに行きました。フクちゃんに教えられながら一緒に作ったゲルマニウムラジオ、イヤホンのなかで人の声がかすかに聞こえ、何も無い部屋のまわり

の空気から音がでてくる、これは驚きました。フクちゃんの家の二階の部屋でのことした。

モーターも作りました。フクちゃんに作る時厳しく言われたのを覚えています。

「巻くときエナメル線に傷を付けたら絶対うごかんから」

僕は真剣になって重ねた鉄板の三ツ又に線の一つずつ一生懸命巻きました。しかし最近中学の教科書1分野下を読んだのですが、整流子にどうつないだのか思い出せません。覚えていることは組み立ては大変苦勞だったこと。形が完成したがぬか喜び、テストで全く動かなかったこと。しかし、このしかしが大切です。フクちゃんは動かない原因をすぐ見つけてなおしてくれました。

「ここがひっついていたらあかん」

整流子がショートしていたのを離し、これで良いと言ってくれました。彼が真剣な眼差しで原因を示して言ったときの雰囲気はいまでも覚えています。ふたたびバネのスイッチを指で押ししました。ブーンと気持ちのいい音を出してモーターは回りました。僕の頭の中は上の方でモーターと同じ早さで回転するように天にも昇っていくようでした。これもフクちゃんの家の二階でした。

新町川で魚釣りもしました。町は河口に近いところで干満の差が大きく小さいときから満ち潮と引き潮に注意するのは僕らの遊びに大切なことでした。フクちゃんは針の結び方、テグスのつなぎ方もおそわりました。絶対はずれへんとおそわったつなぎ方は、大きくなって分かったことですがフィッシャーマンノットでした。

3. ぼくの星空ビューポイント

僕の家の前の道路はせまいところでした。この道は大八車やリヤカー、牛が引く荷台車が行き違えることができれば充分だった時代

です。しかし、この家の前は大切なところでした。はじめて天の川を見たのも、はじめての望遠鏡で月を見たのもここです。



母が道路に打ち水をしてモオオーとした湿った生ぬるい風を顔に受けている僕を思い出します。とくに鼻と目の周辺でそう感じていたように思います。

そして金魚売りの呼び声と天秤棒と桶に載った金魚鉢が静かでキレイだった。ガラスの鉢の縁の波うった瑠璃色と泳ぐ赤い金魚に透きとおった水の中に差し込む光に照らされた水草との色合いは、真夏をいっぺんに涼しくしてくれたように思いました。それをほしいと心には映ったようでした。もちろん買ってもらえるとは思いませんでした。ところてん売りもきました。これは買ってくれました。しょうがとしょうゆの味に細いネギがきざんであったと思います。黒みつ味もありました。これは甘くて最高でした。冬は焼き芋でした。これも買ってくれました。おでん屋もきました。特製のリヤカーでコンロが載せられた構造は忘れましたが、湯気をむんむんと出して、鳴り物をはやしながら家の前にきます。これは、あつあつの四角いこんにやくの上に甘いみそだれをコッテリかぶせ、その上に青のりをまぶすのです。青のりの香りが胃の中に届き思わずかぶりつきます。おいしかった。そしてぱっとライスもきました。

B29が飛んでくる前のことでのどかでした。

4. 初めて作った望遠鏡

フクちゃんと一緒にゲルマニュームラジオやモーターのキットを買った同じ模型屋さんに行きました。この模型屋さんは、いくと僕はとてもわくわくするところでした。

そこで見つけたのです。小さな箱の望遠鏡のレンズセット。フクちゃんも買いました。さあ帰って作ろう！

僕の家の家業は箱屋さんでした。下駄を入れる箱や、背広を入れる箱、お菓子もそうでした。だからボール紙とのりはふんだんにありました。

ボール紙を丸めました。ボール紙は跳ね返ったりごわごわになったり、何度も作り直しました。母が反物を巻いているパイプをなんと僕の頭の中をよぎったか分かりません。これが出来たらすぐレンズを付けられるのにと悔しくてたまりませんでした。

しかし、接眼部がもつとくせ者でした。どんなドロチューブだったのか、スライドさせる支えなどは忘れて覚えていませんが、小さな接眼レンズ一枚を小さく作った筒に着けても倒れ、着けてもゆがみ、また倒れ、ゆらゆらで月を初めて見たのを覚えています。手持ちだったので、いまにして思えば3cm 5倍くらいのものでしたしょう。

この望遠鏡で見た月、月は宮沢賢治の言葉を借れば真珠のお皿のようでした。真珠のように輝いていた月に模様が合ったのです。いままで自分の目で見えなかったすがたです。望遠鏡で月の姿を発見したのです。僕は望遠鏡という優れた道具を作りあげたのだと確信しました。うれしくてうれしくて、胸がいっぱいでした。そしてたぶん、この年の12月が真珠湾攻撃だったはずです。

ついでに天の川の話。幼稚園の時先生に七夕さんのお話を聞き、おうちに帰ったら今晚お星様がいっぱい流れている天の川を見なさいと言われました。流れているところは眉

山の上の方から斜めに流れているからと見る方角も教えてくれました。この時代、いつも見る自動車はハイヤーで、大きな自動車は乗り合いバスくらいです。道路には必ず見つかる馬の糞、荷馬車が主役のようだったと思いますが空はすっきり、夜になると星が屋根瓦の横でも上でもキラキラしていました。一人で家の前にでて先生の言ったとおりに空を見上げました。細かく砕いたガラスを敷き詰めたように見えるところを見ました。きっとこれだろうと思いましたが流れているといえるように動いてないのでハッキリどれが天の川か分かりませんでした。そのときの印象は、先生のおっしゃった方にいつも見るような星空の視野の中に、電信柱の頭が竹とんぼのような黒いシルエットになって邪魔だと思ったことです。

5. 戦争

これからしばらくすると、イナゴの佃煮やカイコのさなぎのフライを食べるようになりました。そして昭和二十年春の頃、町から田舎へ疎開しました。東京大阪の大空襲があった頃です。幸い家族での疎開ができました。

その一年間にはいろいろありすぎました。僕の家から一里半(6km)のところが最初の疎開先でした。疎開する前は紀伊水道を上下通過していくB29、そのたびに警戒警報のサイレンが鳴り響きました。そしてそのたびに家の床下のかび臭い地下壕へ避難しました。僕の小学校3年生?の時です。僕にとってはあのサイレンの響きは恐怖でした。そのころは雲の姿をB29に見間違うほどで、どきっとして肝を冷やしてドキドキした覚えがあります。ほんとに怖かった、いやでいやでたまらなかつた。そして見ました！

最初の疎開先の真っ暗な夜の畑から、6kmほどはなれている僕の家のある町にB29が焼夷弾を落とすのを見ました。この思い出を

つづる機会に、ネットでこの空襲について調べました。この B29 は、今私たちがうれしそうに遊びに行っているグアム島から飛んできたものでした。罹災者は七万人、焼死者は約千人とありありました。

B29 の編隊は町の上空にさしかかると、順番に焼夷弾を落としました。はじめ何か火のついたものを 2~3 個落としたなどと思ったら、その一つ一つがぱっと線香花火のように広がってたくさんの火になって落ちていくのです。そして地上に落ちたと思ったらバーボーと大きな火柱が立つように燃え盛るのです。つぎの B29 が町にさしかかると、また同じことの繰り返しでした。つぎつぎとききました。下からはたくさんサーチライトが交差し、高射砲を発射する音、B29 に当たらず、その下でその砲弾が炸裂する様子が燃え盛る火に照らされて見えました。眉山も町が燃える火の手に照らされ赤く染まっていました。二時間にわたって千五百トン焼夷弾を落としたそうです。真夜中、深い眠りからサイレンの響きで目を覚ましてからのことでした。そのうち日が過ぎ、グラマンとゆう戦闘機も飛んできました。ずんぐりした飛行機で飛んでいる姿はカナブンみたいでした。撃たれはしませんでした。が狙われました。一瞬たんぼのあぜ道から小川の石橋の下に逃げ込みました。グラマンは方向を変え飛び去りました。

B29 の空襲から一ヶ月あまりたった八月十五日のことです。アメリカが上陸してくる！！父はもっと山奥に行かねばと二度目の疎開です。

家族 2 班に分かれ僕はすぐ上の姉とリヤカーを引き父母と小さな三つの妹、二つ下の妹、長女の姉たちは、歩きと自転車の混成でした。下駄か草履を履いて歩きました。道路には舗装はありません。テレビで見る難民みたいなものでした。朝早く発って午後 3 時か 4 時頃

目的地に到着しました。

この日のお昼とてもうれしいことに会いました。大人たちがたむろしてラジオを聴いていました。例の玉音放送です。天皇陛下の声はニュースで何度も聞くのと同じトーンでした。大人たちに戦争が終わったと聞いてなんとなくうれしかったことか。僕には珠玉のように輝くうれしい知らせでした。

田舎へ疎開していたのは一年間ほどで、終戦後の昭和 20 年夏が過ぎ、冬の始まりの頃徳島市内に戻ってきました。ジープを見ました。鼻の高い青い目の西洋人を見ました。そして回りは焼け野原です。焼け跡には家の壁だったはずの土は焼けてかりかりでした。家など建っていません。徳島市で二年間ほど過ごし大阪にまいりました。

この間、望遠鏡作りに徳島で再び挑戦しました。このレンズセットは 80 倍と書いてあったと思います。この倍率に私はエキサイトしました。しかし鏡筒はふにゃふにゃ、接眼レンズにはなぜか 2 枚付いていましたがそれも分からず、やはり筒、筒、筒と悩んで、惨敗でした。

6. コルキットの基本コンセプト

なんと言っても筒 筒がほしい。筒だ！！これがコルキットの原点です。

父は新しい仕事を起こし、仕事のためには大阪だ！と移住しました。そしてその環境のもとで次に作った望遠鏡が、僕の大切で大好きな仕事になったコルキットです。

コルキットは天文ガイドが創刊される前から販売していたと思います。いま手元にある確かな記録として昭和 41 年(1966)初版発行、恒星社の新版 天体観測入門 日本天文学会編に掲載しました、広告を次にご紹介します。ハードカバーの立派な本に広告を載せてもらって光栄です(図 1)。

スピカを発売させていただいたのは、まだしばらくたってからです。当時は普及モデルとしてはシングルレンズのものが主流でした。そして天体望遠鏡は倍率が高く 100 倍とか 80 倍でなければ注目されません。限られた接眼レンズでは対物レンズの焦点距離でかせがねばならず、筒は長くまるでロケット砲のランチャーです。筒が長いと架台が問題になります。もちろんひどい色収差も問題でした。しかしこのような製品でしたが皆さんは自らの工夫でコルキットを活用していただいたようです。

2004 年の夏、JPS の広島年会でコニカミノルタプラネタリウムの今井社長(当時)さんに、彼の中学生のとき 6cm シングルキットをご愛用いただいた様子をうかがいました。月の周辺が天然色に見えるようなその望遠鏡で土星の輪を見たときのすごく嬉しかったこと、いまでも覚えていると話してくれました。そして、口径を絞るなどよく見えるための工夫もされていたのには、は！っとさせられました。購入してくださったお店も新しく立ち上げた大阪時代の家業の大切なお得意先であった、京都市三条下ルのユニバーサル模型店でした。



天体観測入門はコルキットで!!
KOL 天体望遠鏡
工作キット

天体望遠鏡は欲しいが高価で手がでないという方はコルキットはぴったりなだけにでも失敗なしで簡単に作れます。もちろん、実用領域は中学、高校の天体望遠鏡のようによく見えます。完成の喜びに加えて、自分で作った天体望遠鏡で見る月の影は、感動もひとしおのはず!

コルキット製品リスト			
対物レンズ径(口径)	対物レンズ径	対物レンズ径	価格
KT-40	40mm	F=800	¥2,200
KT-60	60mm	F=1200	¥2,800
KT-80	80mm	F=1600	¥3,600
KT-88	88mm	F=1760	¥4,000
T-80	80mm	F=1600	¥3,200
T-100	100mm	F=2000	¥4,500
※本三原(旧キタ)に送料別添付品は別売			

宇宙とあなたをむすぶ——
(株)キング商会 天文係
大阪府南区北堀町4-45 9F-42
TEL:06-6576-7021 FAX:06-6576-7022 代表取締役 西野 隆夫

●カタログ請求は30円切手同封の上上記迄

図1 1966年版広告

オルビス株式会社は昔キング商会とって
いました。

上の広告の中にある写真はスピカの前身

KT-40 といったものです。この機種もそれなりの評価をいただきました。

スピカを発売していても前のモデルはないか？それで木星の大赤斑を見たのだがといただくお客さんもありました。

しかし、鏡筒が長いので架台が課題だ！という問題が残っていました。そこで、土星の輪が見える最低倍率を備え、ファインダーなしでなんとか天体が捉えられる実視野、不十分な架台で像がぎりぎりではぶれなくて、小学4年生くらいの体格に合う大きさの望遠鏡として生まれたのがスピカです。

今年のお正月、東南にあまり高くないまだ薄暗い空にひとり清楚に輝いているスピカの姿を見ました。美しい姿でした。

自分で作った望遠鏡で見るあの感動を！一人でも多くの子供たちに・・・

私はこれをライフワークに死ぬまでがんばるつもりです。

たくさんの人たちに愛用されるコルキット・スピカはしあわせものです。ありがとうございます。

さて、フクちゃんとは最初のレンズと一緒に買いに行つてそれっきりです。いつか徳島に行く機会があれば彼の消息を訪ねたいと思います。阿波踊りがあるときでも行けば会えるかもと・・・

花岡 靖治